

社会科学の学術誌における脱西欧化の一般化

三 谷 文 栄*

周知のように、英語圏の社会科学の学術誌では、注目すべき出来事や理論が見られると、様々な雑誌で大きく特集号で取り上げる傾向がある。特集号は数年かけて準備されるのが一般的だが、すぐに取り上げるべきだとされた場合、比較的短い期間で特集は組まれる。こうした観点からすると、政治コミュニケーション研究、ジャーナリズム研究、メディア研究に関する2023年に発行された英文雑誌では、アクチュアルな出来事を受けて組まれた特集や、論争となる理論的テーマは見られなかった。ただし、近年の動向に沿うように、アカデミズムにおける西欧中心主義を批判的に検討する特集号が複数組まれた（表1参照）。

Journalism 誌と *Media, Culture & Society* 誌における脱西欧化志向

西欧中心主義への批判は、カルチュラル・スタディーズを背景にメディア研究やジャーナリズム研究では比較的早期に行われてきた。*Journalism* 誌は2019年の創刊20周年号で、ジャーナリズム研究で前提となる「ジャーナリズム像」がアメリカ型であり、非西欧型のジャーナリズムの問題を軽視していると指摘しており、現在もその批判的視点を継続している（三谷 2020参考）。

Journalism 誌は、2023年、24号（12巻）に二つの特集を掲載した。一つは「ジャーナリズムとローカルメディア（Journalism and Local Media）」、もう一つが「ジャーナリズムとパンデミック（Journalism and the Pandemic）」である。前者の特集は、アメリカに限らず、ベルギーやフランス、ノルウェーなどのヨーロッパやオーストラリアなどのローカルメディアを取り上げて分析したものである。ノルウェーを事例にした論文では、ローカルメディアが置かれている困難な状況が、ローカルメディアで見落とされがちな点（blind spots）や多様性にいかなる影響を及ぼすのかを論じている（Morlandstø and Mathisen 2023）。この特集は、西欧諸国を中心としたローカルメディアを取り上げているものの、多様性を意識したものとなっている。また、後者の「ジャーナリズムとパンデミック」は、新型コロナウイルス感染症が蔓延した時期のジャーナリズムやニュースを取り上げたものである。そこでは非西欧諸国である中国なども取り上げており、*Journalism* 誌全体を通してアメリカ型のジャーナリズムだけではない形を模索していると言える。こうした動向は今後の特集にも反映されており、オンラインでは特集号「グローバルサウスにおけるラジオジャーナリズム（Radio Journalism in the Global South）」の一部の論文がすでに公開されている（例えば Spurk and Katunzi 2023; Nkoala 2023など）。

本稿で取り上げている雑誌の中で、国家・文化・社会の多様性を最も意識しているのが *Media, Culture & Society* 誌である。同誌は、中国で開発された TikTok を特集号で取り上げた。「TikTok と中国のプラットフォーム化（TikTok and the Platformisation from China）」と題した特集は、

*みたに ふみえ 日本大学法学部新聞学科 准教授

表1 ジャーナリズム、メディア、政治コミュニケーション研究の学術誌の特集号（2023年）

学術誌	掲載号 (巻)	特集タイトル
Journalism	24 (12)	Special section: Journalism and Local Media Special section: Journalism and the Pandemic
Media, Culture & Society	45 (8)	TikTok and the Platformisation from China
Political Communication	40 (3)	Digital Campaigning in Dissonant Public Spheres
	40 (4)	Race and Ethnicity as Foundational Forces in Political Communication

出典：筆者作成

中国を拠点とする革新的なプラットフォーム・テクノロジーが、中国以外の地域のデジタル文化を生み出し、そして破壊する可能性があるとしたうえで、「TikTok の世界的な台頭によって、地政学的な不安が増大している」と指摘している（Lin and de Kloet 2023）。そのうえで、TikTok など、これまで見られなかった新たな SNS やプラットフォームが出てきたことを考慮すると、より多様なアプローチを検討する必要があると述べた（ibid.）。特集の論文も中国、インド、フィリピンといったアジア諸国を事例に、各国で TikTok がいかに受容され、あるいは禁止されたのかを取り上げており、多様なアプローチを模索した結果と言えるだろう。

Political Communication 誌における脱西欧化志向

カルチュラル・スタディーズの影響を直接的に受けた *Journalism* 誌や *Media, Culture & Society* 誌に比べて、脱西欧化の歩みが遅いのが *Political Communication* 誌である。*Political Communication* 誌は2023年、二つの特集号を掲載した。一つが「不協和な公共圏におけるデジタルキャンペーン（Digital Campaigning in Dissonant Public Spheres）」であり、もう一つが「政治コミュニケーションにおける基礎的な力としての人種とエスニシティ（Race and Ethnicity as Foundational Forces in Political Communication）」である。前者は、前編集部が企画したものであり、現編集長レジーナ・G・ローレンスのもと企画されたものが後者になる。注目すべきは、ローレンスが40号1巻の冒頭で、政治コミュニケーション研究が現在抱えている問題を指摘したことである。彼女は、同誌で過去6年間に発表された194本の論文の内容分析を行い、多様性の観点から以下のような問題があると述べた（Lawrence 2023）。

- ① *Political Communication* 誌に掲載された政治コミュニケーションのダイナミクスを国家間で比較した研究は、時代とともに増えてはいるものの、比較的少ない。過去6年間に発表された194本の論文を分析したところ、80%以上が単一国家を対象とした研究であった。
- ② 比較研究であれ単一国家を対象とした研究であれ、対象となった国家は圧倒的に西欧民主主義国家であった。同じ194本の論文のうち、80%以上がアメリカ、カナダ、ヨーロッパに焦点を当てていた。
- ③ 過去6年間に発表された論文の筆頭著者のうち、3分の2以上が男性であった。
- ④ ジェンダーや人種の問題を明確に取り上げた論文は10%未満であった。

これらの指摘は、政治コミュニケーション研究がいかに西欧中心主義的であることを浮き彫りにするものである。こうしたローレンスの問題関心は人種とエスニシティをテーマとした特集号に反映されていると言える。

特集「政治コミュニケーションにおける基礎的な力としての人種とエスニシティ」は、政治コミュニケーション研究がいかに白人の視点を中心に据えてきたのかと問題提起したものである。そうした視点が中心となった背景として、第一に政治コミュニケーションの研究成果の多くが西欧社会を対象としていること、第二に行動科学を重視した比較的短期的な視点で行われる効果研究と、社会的に構築され、歴史的に位置付けられてきた人種・エスニシティの問題関心が適合しないこと、第三に政治コミュニケーション研究が西欧中心的な科学実践を重視してきたことが挙げられた (Coles and Lane 2023: 369-372)。こうした問題関心から掲載された論文は、人種やエスニシティを政治コミュニケーション研究の中心に据えることで、多民族国家の政治体制に関するより深い理解を可能にし、それによって政治コミュニケーション研究の可能性を広げると指摘する (Zárate 2023; Harbin 2023)。

人種やエスニシティを主題にした *Political Communication* 誌の特集は、編集長の問題意識を反映した、西欧中心主義を改めて問う重要なものだと評価できる。しかし、この特集では、依然としてアメリカ政治に焦点を当てた論文が多数であり、「非西欧」へ視野を広げたものとは言いがたい。政治コミュニケーション研究、その中でも特に効果研究がアメリカを中心に発達してきたこと、そして同誌がアメリカ政治学会の部会が発行していることを考慮すると、「非西欧」に視野を広げていくことにはおのずと限界があるだろう。非西欧諸国をテーマにした論文には、その国家を取り上げる正当化が求められる一方で、アメリカ政治をテーマにすることでそれを免れてきた研究もある。国際化を志向するのであれば、たとえアメリカ政治をテーマにする研究であったとしても「正当化」から免れないことを徹底することが求められる。*Political Communication* 誌はこうした問題に取り組むと表明しており、今後の変化を期待したい (Lawrence 2023: 2-3)。

参考文献

- Coles, S. M. & Lane, D. (2023) "Race and ethnicity as foundational forces in political communication: Special issue introduction," *Political Communication*, 40 (4), pp.367-376.
- Harbin, M. B. (2023) "Don't make my entertainment political! Social media responses to narratives of racial duty on competitive reality television series," *Political Communication*, 40 (4), pp.464-483.
- Lawrence, R. G. (2023) "Editor's note," *Political Communication*, 40 (1), pp. 1-3.
- Lin, J. and de Kloet, J. (2023) "TikTok and the platformisation from China: Geopolitical anxieties, repetitive creativities and future imaginaries" *Media, Culture & Society*, 45 (8), <https://doi.org/10.1177/01634437231209203>
- Morlandstø, L. and Mathisen, B. R. (2023) "Blind spots and diversity in a local media landscape," *Journalism*, 24 (12), pp. 2575-2592.
- Nkoala, S. (2023) "How radio influences indigenous language podcasts in South Africa: A case study of *Epokothweni* and *iLukuluku*," *Journalism*, online first <https://doi.org/10.1177/14648849231214054>
- Spurk, C. and Katunzi, A. (2023) "The quality of radio journalism in Tanzania: Empowering citizens or at a crossroads?" *Journalism*, online first <https://doi.org/10.1177/14648849231214051>

三谷文栄 (2020) 「ジャーナリズム研究の諸課題」『ジャーナリズム&メディア』14号、pp.160-164。

Zárate, M. G. (2023) “Dimensions of pandering perceptions among Hispanic Americans and their effect on political trust,” *Political Communication*, 40 (4), pp.440-463.